

●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 43

菖蒲池伝説

伝説
 菖蒲池の西に
 咲き誇る
 菖蒲が織りなす
 夢浮橋

宮の西
 池一面に




かつて神宮の西にあった菖蒲池

熱田まつりに菖蒲の花飾る

その昔、熱田神宮の西門から少し西に行ったところに、菖蒲池という池がありました。事の起こりはこうです。応永元年(1394年)、上杉謙信と同族という浅井右近善長という人物が熱田に来て、神宮の大内人職であった大喜五郎丸の屋敷を買い取り、亀宝山福重寺を創建しました。そこは西に海を望む場所で、周囲に堀をめぐらせたところ、そこに菖蒲が自生して美しい花を咲かせたといわれます。これにより、あたり一帯を「菖蒲池」と呼ぶようになり、後には「菖蒲池町」という町名までできました。文政年間(1818年～1829年)作製と推定される古地図にも「菖蒲池」が記載されています。

亀宝山福重寺から臨済山龍珠禅寺にかけてが、菖蒲池があった場所といわれていますが、今は民家が建て込んでいて、その痕跡も面影もまったくありません。熱田神宮の例祭・熱田まつりは、昔は5月5日の節句に行われていたため、尚武祭とも呼ばれていました。「しょうぶ」の語呂から、熱田まつりの時に菖蒲の花を飾るようになり、それから人々は熱田まつりを菖蒲祭と呼ぶようになったといわれて

います。しかし、いつしか菖蒲池もなくなり、菖蒲の花を飾る習慣もなくなってしまい、これにより、菖蒲祭の名も忘れ去られてしまったといわれます。

龍珠禅寺は、寛文5年(1665年)に神戸町から移転してきた寺です。臨済宗妙心寺派の寺で、天文元年(1532年)、加藤延隆入道全朔によって創建されました。開山は南溟和尚です。延隆は、熱田の羽城に居を構えた豪族・加藤図書助順光の弟で、隼人と称しました。なお、延隆の妻は、前田利家の姉にあたります。開山した南溟和尚は、美濃の寺に住持していた時、織田信長の兵が乱入して捕らえられました。そして、縄で縛られ尾張の各地を「物知りはいらんか」と引き回されていましたが、ちょうど熱田に来たところで、延隆が気の毒に思って銭一貫文で買い取り、縄を解いたのでした。

和尚に伝説を問うと、立て板に水のごとく流暢で滑らかな説法に感心し、これが縁で延隆は、南溟和尚に深く帰依し、龍珠禅寺を創建し、開山和尚として迎えたのです。



水面に浮かぶ自分の姿に恋心

自己愛の悲しすぎる結末

昔、熱田神宮の西にあった菖蒲池の話でしたが、ギリシャ神話でも泉にまつわる話があります。ナルキッソスの自己愛の話がそれです。美しい容姿を持つナルキッソスは、水の精として生まれ、幼い頃からニンフ(妖精)たちに可愛がられて育ちました。ここにも一人、ナルキッソスに思いを寄せるニンフがいました。明るく陽気でおしゃべり好きなエコーです。

そんなある日、「ゼウスが森のニンフと浮気をしている」とにらんだ妻のヘラが、相手を突き止めようと森にやってきました。エコーは仲間のニンフを守るために、お得意なおしゃべりでヘラの気をそらします。最初のうちに、仲間を逃がすことに成功していたエコーですが、長くは続きません。エコーの策略に気づいたヘラは「これからは勝手におしゃべりができないよう、誰かに話しかけられないかぎり、自分からは話すことができないようにしてやる」とエコーが自由に話す力を奪ってしまいました。

木陰からこっそりナルキッソスの姿を見つめるしかなくなったエコーに、ある日チャンスが訪れます。道に迷ったナルキッソスが助けを求めて叫んだのです。

「道に迷ってしまった。誰かいないか」

問いかけてくれたおかげで話すことができるようになったエコーは、すぐに答えます。

「ここにいるわ」

エコーはナルキッソスの前に姿を現しました。しかし、突



▲ 福重寺(左)と龍珠禅寺。かつてこの周辺に菖蒲池があったといわれている。

43rd Letter

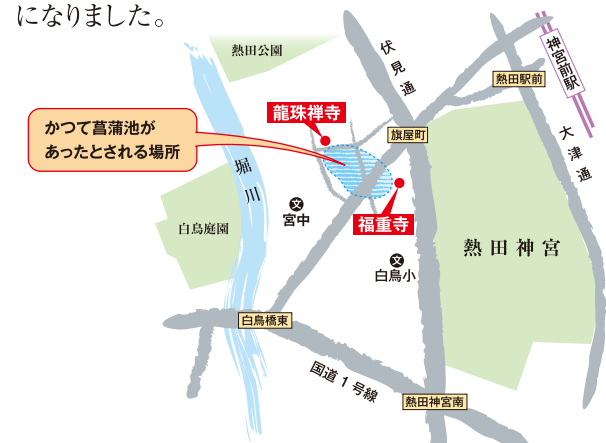


然現れたエコーに驚いたナルキッソスは、自分から呼び出しておいて、逃げ出してしまう。そして逃げているうちにのどが渇いて泉の前で足を止めた。

膝をついて水面に口をつけて水を飲もうとすると、見たことのないような美しい少年が自分を見返しています。呆然と動けなくなったナルキッソスは、自分をじっと見つめる少年と心を通わせたいと思い、微笑みかけました。すると、少年も微笑み返します。ナルキッソスは、思いを伝えようと彼に口づけしようとする、その時だけ彼の姿がかき消されてしまいます。何かが二人の間を邪魔しようとしていて、何度も顔を近づけ試みますが、あと一歩のところまで少年は姿を消してしまいます。

どうすることもできないもどかしさに苛立ちながらも、ナルキッソスは、泉の前を離れることができなくなりました。そして、食事もしないで泉の前にしゃがみこんだまま、何日も水面に映る自分の姿に焦がれ続けたナルキッソスは、やがて衰弱して息絶えました。

なお、この物語がもとになり、うぬぼれと孤独癖の強い自己陶酔症の人のことをナルシストと呼ぶようになりました。



※次回は、熱田の法持寺伝説を特集します。お楽しみに。

■ 写真 / Kiyoshi K ■ イラスト / Rei ■ 取材文 / Icarus